

# 施設実習での学びと実習施設種、実習内容との関連性の検討

松 藤 光 生      岡 本 満 江

## Relationship Between Learning in Practical Training at Welfare Facilities and The Type of Facilities and Contents of Training

Mitsuo Matsufuji      Mitsue Okamoto  
(2018年11月22日受理)

### 1. 問題と目的

平成30年、「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」の一部改正が行われ、平成31年4月より施行されることが厚生労働省より通知された。この度の改正では、平成29年の保育所保育指針の改定が行われたことなどを踏まえ、より実践力のある保育士の養成に向けての見直しが行われている。大学等の保育士養成施設は、来年度の施行に向けて、各科目の教授内容等について変更や修正が求められている。この度の改正では、保育実習実施基準についても改正が行われ、特に実習指導に際して学内の実習指導者その他の教員や実習施設の实習指導者が連携を行うことについての文言が追加されている。これに関しては、相浦ら（2008）や岩本ら（2017）が指摘するように、実習に関してその内容が実習施設に任せられており、十分な実習の事前指導が行えていない現状を反映していると思われる。つまり養成施設は、今後実習先施設との連携等を図りながら、より効果的な実習指導が求められているといえる。

保育士養成課程の実習では、保育所での実習に加え保育所以外の児童福祉施設や障害者支援施設等での実習（以下、施設実習）が必修となっている。保育士は、保育所だけでなく児童養護施設や障害児入所施設などにおいて被虐待児や障害児に対して専門的な保育を実践できることが社会的に求められている。その専門性を身につけるためにも施設実習は、重要な位置づけにあるといえる。施設実習での体験は、学生に対して様々な影響を与えることが考えられ、様々な研究や報告がなされている。具体的には施設実習を経る事で施設に対する意識の変化（平尾・土谷；2016、多田内・重永；2014、土谷；2006）があることや直接的な援助方法や利用者児の特性理解など多くの面で学びがあったこと（藤重；

2014）などが示されている。また山口（2007）は、実習前後で学生の自己効力感といきがい感が肯定的に変化したことを報告しており学生にとって施設実習体験が多様な面で影響を与えることが考えられる。

施設実習で対象となる施設は、表1に示されるように多様な種類となっているが、学生が実習で体験出来る施設は、基本的に一つないしは二つとなっている。施設種によって接する児童の年齢や特徴、実習内容が異なっており、そこでの学生の体験や学びも大きく異なっていることが報告されている。土谷（2006）や石山ら（2010）の報告では施設種により学生の学びや「気づき」などに相違が見られたと報告がある。そこで筆者は、実習先の施設種による学生の学びや体験の違いに着目し、松藤（2016、2017、2018）においてその相違点やそこから考えられる実習指導について報告を行ってきた。具体的には、①障害児の施設であれば障害児についての理解、母子生活施設では保護者支援についての理解といったように、それぞれの施設の利用児や利用者の理解が深められること、②実習生に対しての保育士から

表1. 施設実習の主な実習先

施設種	概要
乳児院	主に2歳までの乳児を保護者に代わって養育する施設
児童養護施設	主に2歳～18歳の児童を保護者に代わって養育する施設
母子生活支援施設	母子に生活環境を提供すると共に自立の支援を行う施設
情緒障害児短期治療施設	情緒障害を抱える児童を入所させ、治療と共に自立の支援を行う施設
児童自立支援施設	子どもの行動上の問題、「環境上の理由により生活指導等を要する児童を入所させ指導と自立の支援を行う施設
障害児入所施設	知的障害、肢体不自由、視聴覚障害等を抱える児童を入所させ、必要な治療、生活の支援、機能訓練等を行う施設
児童発達支援センター	知的障害、肢体不自由、視聴覚障害等を抱える児童（主に幼児）を通所させ、必要な治療、生活の支援、機能訓練等を行う施設
障害者支援施設	18歳以上の障害者を入所させ、日常生活、社会生活を支援する施設
指定障害福祉サービス事業所	18歳以上の障害者を通所させ、日常生活支援や就労支援、自立に向けた支援を行う施設

の直接的な指導に関しては、特に障害児の入所施設で多く受けられること、③児童養護施設、母子生活支援施設では、児童の試し行動への対応などの経験から利用児への関わり方や関係の作り方について学びを得られること、④児童発達支援センターでは、障害児についての理解、保育技術や保護者支援についての理解など幅広い学びが得られることなどが報告されている。また松藤（2018）では、実習先が希望通りに決定したかどうか、学生の学びに影響するかどうかを検討した。結果としては、実習先が希望通りに決定したかどうかは、実習での体験や学びに大きな影響を与えず、実習において希望通りの体験や予想外の学びが得られたかどうかの影響を与えることが報告されている。これらの報告を踏まえた実習指導に関しては、松藤（2018）により実習施設においてどのような学びや体験が得られるのか、施設の特徴や利用児者について事前学習の中で丁寧に指導することにより、学生がより具体的に実習での学びや体験にイメージを持って、実習に臨み、深く幅広い学びや体験を得られる可能性が示されている。

ここで実習での学びや体験の内容を検討する方法に関して、松藤（2018）において多様なカテゴリが示されていることを考慮すると過去の研究で用いた実習学習尺度では、その学びや体験の内容を捉えきれていない可能性が考えられる。実習施設ごとの学びや体験の特徴についてより詳細な検討を行うためには、実習の学びや体験についての評定尺度を再検討することが必要である。また同じ施設種であっても、配属されるクラスやホームによって、関わる対象の発達段階や特性が異なり、学びや体験が異なる可能性が考えられる。実際の実習において、配属クラスや関わる年齢等についても検討を行うことが必要である。

以上より本研究では、多様な施設種での施設実習において、それぞれの施設において配属クラスや関わる対象の状況について調査を行うこと、それぞれの施設種による学びや体験について評定する尺度を作成すること、その尺度を用いて施設種ごとの学びについて差異を検討することを目的とする。加えて松藤（2018）において報告された実習先が希望通りに決定したかどうかや実習において希望通りの体験や予想外の学びが得られたかどうか、実習での学びに影響を与えるかどうかを新しい尺度を用いて再検討を行う。その上で、各施設における学びや体験の特徴を明らかにし、施設実習指導のあり方について検討を行うことを目的とする。

## 2. 方 法

### (1) 調査対象

A 大学、保育士資格取得希望の4年生、113名

実習先の決定の流れは、学生が3年時に実習先についての希望調査を実施し、それを元に担当者が実習先の確保を行った。全ての学生が第1希望の実習先に行くことが可能になるようには実習先の確保は行えないため、実習先の確保後に改めて学生に希望調査を行った。その際には「第1希望にあげている施設を希望するか」「第1希望にあげている施設種を希望するか」という事を中心に調査を実施し、可能な限り希望に合うように実習先の配当を行い、基本的に殆どの学生が第4希望までの施設での実習となった。なお第1希望から第4希望まで異なる施設種での施設名称を記入する形で調査を行っているため、第1希望の施設種であれば、記入していない施設種であっても構わないと考える学生がいることを考慮し、上記の「第1希望にあげている施設種を希望するか」の質問を設けている。この質問に「希望する」と回答した学生に関しては、希望の施設種になるように配当を行った。また若干名ではあるが、希望とは沿わない実習先での実習を行う学生もいたが、その際には個別に面談を行い学生の了解を得た。

### (2) 調査内容

#### ① フェイスシート

学生番号、実習先施設について回答を求めた。学生番号については、実習先施設との正誤を確認するためだけに用い、分析を行う上では、個人の特定は行っていない。また実習先施設に関しては、乳児院、児童養護施設、母子生活支援施設、児童発達支援センター、障害児入所施設の5グループに分けてその後の分析を行った。

#### ② 実習内容についての質問項目

実習先での配属クラス・ホーム、実習先で主に関わった児童・利用者の年齢、障害児・者と関わった場合にはその障害種について記述式にて回答を求めた。

#### ③ 実習先の希望、体験を問う項目

実習先が希望通りであったかを問うために「実習先施設は、自分の希望通りに決まった」という質問に「①全くそう思わない」～「④とてもそう思う」の4件法で回答を求めた。また実習先での体験を問うために「実習では、希望通りの学び、体験が得られた」「実習では、実習前に予想していなかった学び、体験が得られた」の2項目に「①全くそう思わない」～「④とてもそう思う」の4件法で回答を求めた。

#### ④ 実習での学び尺度

実習における学びの内容を測る尺度として、松藤

(2016、2017、2018) で使用された実習学習尺度と松藤(2018)の実習での学び、体験に関するのカテゴリの内容を参考に、実習での学び尺度16項目を作成し使用した。

### (3) 調査時期

実習終了後第1回目となる実習指導の授業の中で実施をした。実習時期が学生によって異なるため、実習終了から1か月程度経過している学生もいれば、直前まで実習があった学生もいる中での実施となった。

## 3. 結 果

### (1) 実習中に関わった対象について

まず各施設での実習人数を表2に示す。なお児童発達支援センターについては、17名が主に知的障害を、2名が主に肢体不自由を対象とした児童発達支援センターでの実習になっており、障害児入所施設については、4名が主に視覚・聴覚障害を、4名が主に知的障害を、3名が主に肢体不自由を、9名が主に重症心身障害を対象とした障害児入所施設での実習となっている。

次に各施設での実習において主に関わった対象の年齢について表3に示す。なおその他に関しては、児童養護施設に関しては18歳～20歳が1名、障害児入所施設に

表2. 各施設での実習人数

乳児院	23
児童養護施設	33
母子生活支援施設	17
児童発達支援センター	20
障害児入所施設	20
(人)	

表3. 各施設での実習人数

	0歳児	0～3歳児	3～6歳児	0～6歳児	3～18歳児	7～18歳児	成人	その他
乳児院	4	19	0	0	0	0	0	0
児童養護施設	0	0	3	0	19	10	0	1
母子生活支援施設	0	0	0	6	1	10	0	0
児童発達支援センター	0	0	17	0	2	0	0	0
障害児入所施設	0	0	0	2	0	5	2	8
(人)								

表6. 各施設の実習で関わった障害種

	関わりなし	知的	発達	知的+発達	肢体不自由	視覚・聴覚	重症心身	その他
乳児院	23	0	0	0	0	0	0	0
児童養護施設	32	0	1	0	0	0	0	0
母子生活支援施設	17	0	0	0	0	0	0	0
児童発達支援センター	0	5	1	8	1	0	0	5
障害児入所施設	0	4	0	1	2	2	5	6
(人)								

表4. 乳児院配属ホーム

0歳児ホーム	4
1～3歳児ホーム	9
混合	9
(人)	

表5. 児童養護施設配属ホーム

女子ホーム	10
男子ホーム	6
幼児ホーム	3
混合	14
(人)	

関しては、幼児～成人までを対象として関わったものが含まれていた。加えて乳児院、児童養護施設に関しては配属されたホームについて表4、5に示す。なお表中の混合とは、女子ホームに5日、男子ホームに5日間など10日間の実習中に複数のホームにて実習を行った場合となる。

さらに各施設の実習において関わった障害種について表6に示す。なおその他に関しては、知的障害と聴覚障害が重複している場合などが含まれる。

### (2) 実習での学び尺度の因子分析

実習での学び尺度の16項目に関して、因子分析(重み付けのない最小二乗法、プロマックス回転)を行った。因子負荷量3.5を基準とし、全ての因子に対して基準を下回る4項目(施設の利用児者の背景が理解出来た、利用児者への関わりにおいて大切な点を理解出来た、施設内の環境構成における意義や意図が理解出来た、児童の特性に合わせた環境への配慮について理解出来た)を削除して、再度因子分析(重み付けのない最小

二乗法、プロマックス回転)を行った結果、解釈可能な4因子が抽出された。それぞれの因子に負荷量の高い項目を中心に命名を行い、第1因子は「施設理解」、第2因子は「保護者支援理解」、第3因子は「障害理解」、第4因子は「関わり方理解」と命名した(表7)。

### (3) 施設種による実習での学びの差異の検討

実習施設種により実習での学びに差異があるかを検討するために、実習施設種を独立変数、実習での学び尺度のそれぞれの因子得点を従属変数とした1要因の分散分析を行った。結果、「障害理解」に関して有意差( $F_{(4,101)} = 3.53, p < .01$ )が認められた。Tukeyによる多重比較を行ったところ、児童発達支援センター・障害児入所施設

設が他の3つの施設と比較して有意に高い( $p < .01$ )という結果が得られた(図1)

### (4) 施設での関わった対象の違いによる学びの差異の検討

施設で関わった対象の違いにより実習での学びに差異があるかを検討するために、児童養護施設、乳児院、母子生活支援施設、障害児入所施設のそれぞれの施設ごとに関わった対象年齢を独立変数、実習での学び尺度のそれぞれの因子得点を従属変数として、 $t$ 検定を実施した。なお独立変数としては、乳児院は(0歳-0~3歳)の2水準、母子生活支援施設は(0~6歳-3~18歳)の2水準、障害児入所施設は、(0~18歳-0~成人)の

表7. 実習での学び尺度の因子分析結果

第1因子:施設理解( $\alpha=.712$ )				
児童福祉施設の利用児者にとっての役割を理解出来た	.865	-.001	.039	-.214
児童福祉施設の社会的役割を理解出来た	.664	-.036	-.014	.054
施設職員の役割や業務内容が理解出来た	.482	-.008	.119	.221
施設の利用児者の特徴や特性の理解出来た	.408	-.078	.039	-.013
第2因子:保護者支援理解( $\alpha=.642$ )				
保護者支援における大切な点を理解出来た	-.131	.814	.082	-.068
保護者への関わり方が理解出来た	-.089	.793	.109	-.038
他職種間の連携のあり方が理解出来た	.118	.389	-.065	-.108
第3因子:障害理解( $\alpha=.852$ )				
障害特性に合わせた関わりを実践できた	-.013	-.060	.980	.114
障害特性に合わせた関わりにおいて大切な点を理解出来た	.116	.161	.733	-.069
第4因子:関わり方理解( $\alpha=.625$ )				
利用児者への適切な関わり方を実践できた	-.086	-.238	.114	.724
施設で必要とされる保育技術を実践できた	-.023	.292	-.112	.492
施設で必要とされる保育技術が理解出来た	.313	.298	-.139	.350

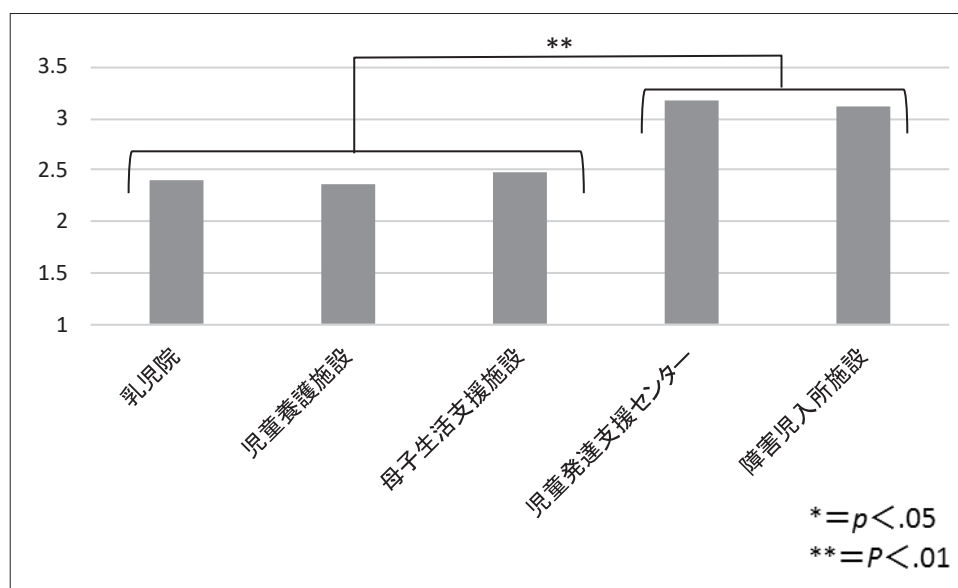


図1. 施設種による「障害理解」の差



2水準として分析を行った。児童養護施設に関しては、独立変数が（3～6歳 - 3～18歳 - 6～18歳）の3水準となるので1要因の分散分析を行った。また児童発達支援センターについては、9割以上が3～6歳であったため、分析対象外とした。

結果、乳児院・児童養護施設においては有意な結果が得られなかった。母子生活支援施設に関しては、「保護者支援理解」について有意な結果（ $t = 3.25$ ,  $df = 14$ ,  $p < .01$ ）が認められ、3～18歳を対象として実習を行った場合の方が保護者支援理解を高くしているという結果が得られた。また障害児入所施設に関しても、「保護者支援理解」について有意な結果（ $t = 2.69$ ,  $df = 15$ ,  $p < .05$ ）が認められ、0～18歳を対象として実習を行った場合の方が保護者支援理解を高くしているという結果が得られた（図2、3）。

#### (5) 実習先希望の認知、学びや体験の認知による学びの差異の検討

「実習先施設は、自分の希望通りに決まった」に関し

ては「全くそう思わない」が5名、「そう思わない」が14名であり、全体の16%の学生は、実習先が希望通りに決まったと思っていなかった。残りの83%（そう思う40%、とてもそう思う43%）の学生が実習先は、自分の希望通りに決まったと捉えていた。

「実習では、希望通りの学び、体験が得られた」に関しては「全くそう思わない」の回答はなく「そう思わない」の回答も2%であった。残りの98%（そう思う65%、とてもそう思う33%）の学生が実習先で、自分の希望通りの体験が得られたと捉えていた。

「実習では、実習前に予想していなかった学び、体験が得られた」に関しては「全くそう思わない」の回答はなく「そう思わない」の回答も1%であった。残りの99%（そう思う42%、とてもそう思う65%）の学生が実習先で、自分の希望通りの体験が得られたと捉えていた。

実習先が希望通りに決まったかどうかの捉え方により実習の学びに差があるかを検討するため「実習先施設は、自分の希望通りに決まった」の質問に「全くそう思わない」と回答した人数が5名だったため、「全くそ

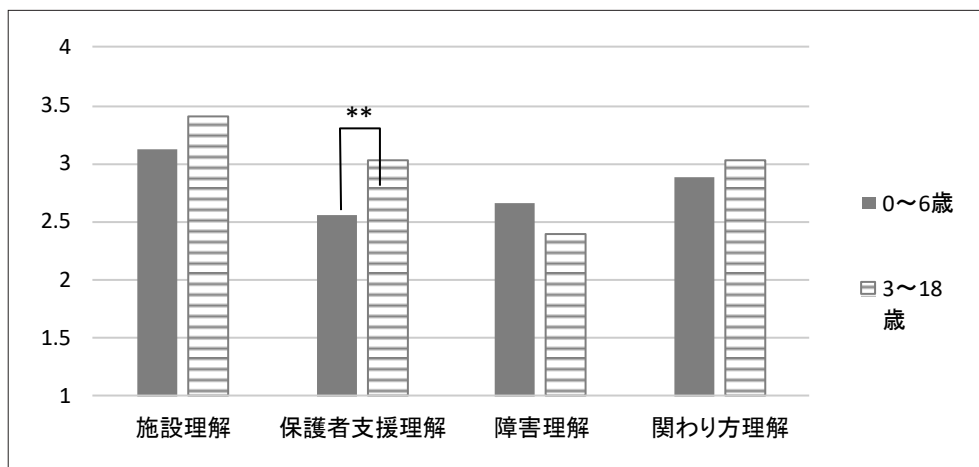


図2. 母子生活支援施設の実習で関わった対象年齢の違いによる学びの差

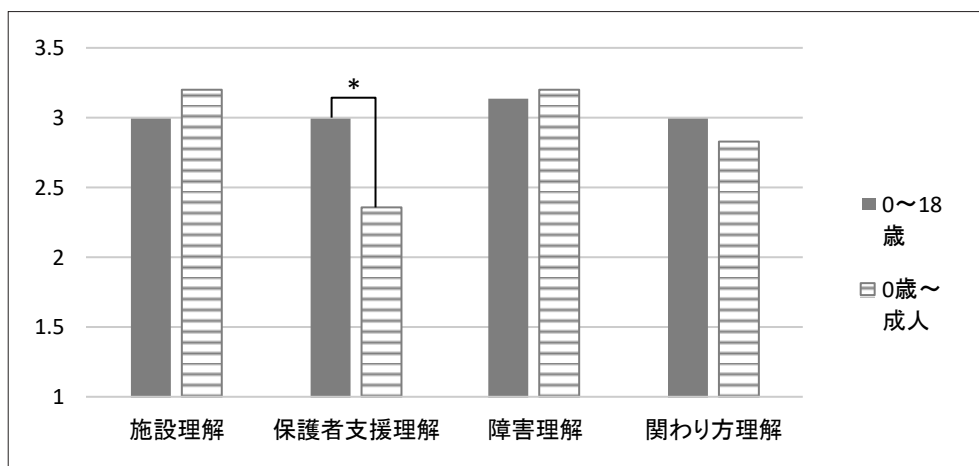


図3. 障害児入所施設の実習で関わった対象年齢の違いによる学びの差

う思わない」もしくは「そう思わない」と回答した群、「そう思う」と回答した群、「とてもそう思う」と回答した群で分け、その実習先希望の認知を独立変数、実習での学び尺度の各因子得点を従属変数とした1要因の分散分析を行った。

結果「関わり方理解」に有意な差 ( $F_{(2,103)} = 6.68, p < .01$ ) が認められた。Tukeyによる多重比較を行ったところ、「とてもそう思う」と回答した群の方が「全くそう思わない」「そう思わない」と回答した群と比較して「関わり方理解」が高い ( $p < .01$ ) という結果が得られた。(図4)

また実習先で希望通りの学びや予想しない学びが得られたかどうかにより、実習での学びに差があるかを検討するため「実習では、希望通りの学び、体験が得られた」「実習では、実習前に予想していなかった学び、体験が得られた」の質問に「そう思う」と回答した群と「とてもそう思う」と回答した群で分け、それぞれを独立変数、実習での学び尺度の因子得点を従属変数としたt検定を行った。なお「そう思う」と回答したデータが

どちらの質問でも少数だったため、今回は分析対象とはしなかった。

結果、「実習では、希望通りの学び、体験が得られた」の質問に対する回答による群分けでは、「施設理解」に有意な差 ( $t = 8.07, df = 102, p < .01$ ) が認められ、「とてもそう思う」と回答した群の方が高かった。また「実習では、実習前に予想していなかった学び、体験が得られた」の質問に対する回答による群分けでは「施設理解」「障害理解」に有意な差 ( $t = 3.62, df = 102, p < .05$ ;  $t = 9.16, df = 102, p < .01$ ) が認められ、どちらも「とてもそう思う」と回答した群の方が高かった。(図5、6)

## 4. 考 察

### (1) 各施設での実習状況について

各施設での実習人数は、表2に示された通り、児童養護施設での実習人数が割合としては多いが、他は比較的均等な割合である。各施設での関わった対象年齢に関し

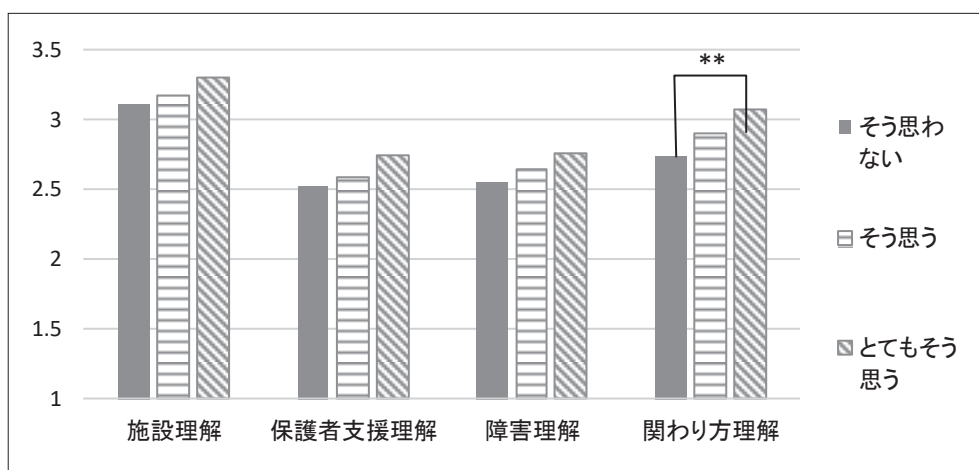


図4. 実習先が希望どおりに決まったどうかによる学びの差

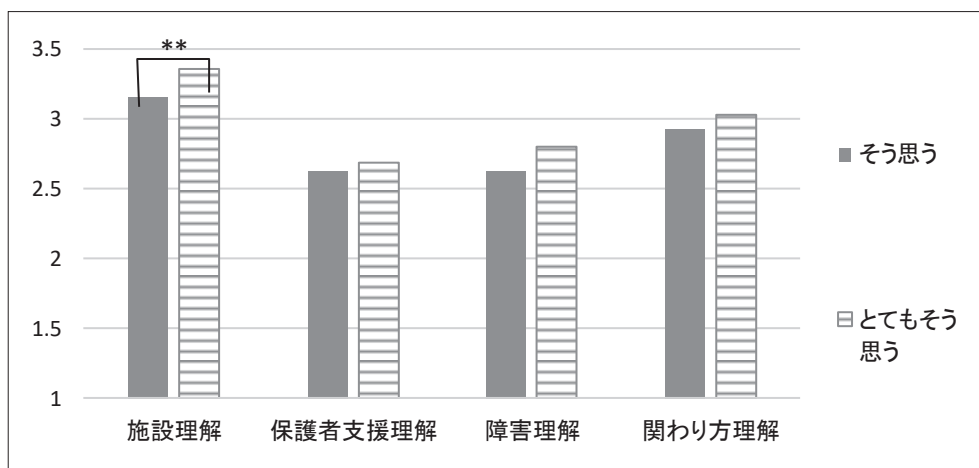


図5. 希望通りの学びが得られたかどうかによる学びの差

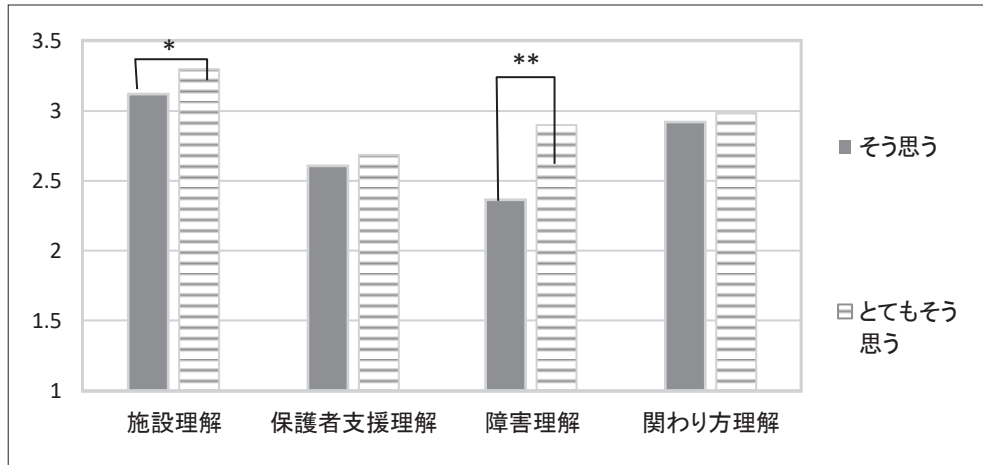


図6. 予想外の学びが得られたかどうかによる学びの差

では、表3に示された通りである。乳児院は、基本的に0～3歳が多く、少数だが0歳児のみに関わるようになる場合も見られていた。これは表4にも示された通り、0歳児ホームに10日間配属された場合となるが、0歳児と1～3歳児では発達も異なり、必要となる支援も異なるので、具体的な実習内容も異なることが予想される。事前指導の中でも、その点を考慮した指導が必要となると思われる。また児童養護施設に関しては、3～6歳児の幼児期の子どものみ関わった場合も見られていた。表5に示された幼児ホームのみ配属された場合となるが、児童養護施設での実習の場合、事前指導においても学齢児の様子や関わりについて扱うことが多く、学生も学齢児との関わりを想定して実習に臨むことが多い。そのような場合、事前指導や事前学習と実際の実習内容が異なる可能性があるため、その点を踏まえた指導を考慮する必要がある。母子生活支援施設では、0～6歳児に関わった場合と学齢児との関わりをもった場合とが見られていた。これは、母子生活支援施設の中では、園内の保育所を有している施設があり、その施設での実習の場合、その園内保育所での実習となるのに対して、園内に保育室があるが、利用が少ない場合には、学習室等での学齢児との関わりが実習の中心となることを示していると考えられる。児童発達支援センターでは、幼児期の子どもとの関わりが中心であるが、中には学齢児との関わりを持った場合も見られた。これは、児童発達支援センターの中には、放課後等デイサービスを実施している施設があり、その放課後等デイサービスを利用している学齢児との関わりがあった場合と思われる。次に障害児入所施設では、どのような障害を主な対象とした施設なのかによって関わった対象が異なっていた。知的障害、視覚障害・聴覚障害を主な対象とした入所施設では、7～18歳の学齢児との関わりが中心であった。また肢体不自由児を主な対象とした入所施設では、園内の保育室

での実習が中心となり、0～6歳児との関わりが中心となっていた。重症心身障害を主な対象とした入所施設では、幼児期から高齢期までかなり幅が広い年齢層が関わるの対象となっていた。このように同じ施設種であっても、関わる年齢の対象が、その施設の設備・方針・主に扱う障害種などによって異なることが示されており、そのことを踏まえ様々な年齢層についての発達や施設内での支援について事前指導の中で扱うが必要になると思われる。

次に表6に示された主に関わった障害種については、まず乳児院、児童養護施設、母子生活支援施設に関しては、児童養護施設で発達障害との関わりが1件見られたのみで、その他は障害児との関わりがないという結果であった。しかし児童養護施設入所児童等調査結果（厚生労働省雇用検討・児童家庭局、2015）では、乳児院児の28.2%、児童養護施設児の28.5%、母子生活支援施設児の17.6%が何らかの障害を抱えていることが示されている。特に、児童養護施設児は、12.3%が知的障害、11.1%が発達障害を抱えており、それら児童と実習中に関わりを持つことがなかったとは考えにくい。このような入所児童の特性や状況に関しては、事前指導の中で学生も伝えているが、おそらくこれらの施設に入所している児童の場合、知的障害を抱えていても軽度であるなど、見た目上障害の有無の判断が難しかったのではないと思われる。

## (2) 施設種による実習での学びの差異について

実習施設種による実習での学びの差を検討したところ、施設種による差が認められ、児童発達支援センター、障害児入所施設での実習の方が他の3つ施設と比較して「障害理解」がより出来るという結果が示された。この結果に関しては、児童発達支援センター、障害児入所施設は、障害児の支援を行う施設であり、その専

門性の高さから学生が障害を理解する学びや体験を多く積むことが出来たためであると思われる。しかし考察(1)でも述べたように、他の施設であっても障害児は一定数いることが示されている。今後は、障害児の支援を行う施設以外の実習であっても、障害理解を出来るような実習のあり方について検討を行うことが必要である。

また今回の結果では、「保護者支援理解」について施設種での差が認められず、松藤（2016、2017、2018）とは異なる結果となった。これに関しては、他の施設でも保護者支援を行っており、そのことを意識した実習を行うことで他の施設での実習においても保護者支援を理解することが可能であった可能性や、母子生活支援施設であっても児童の支援を行うことが実習の中心となるため、他の施設と比較しても保護者支援の理解をより出来るようになることがなかった可能性などが考えられる。

### (3) 関わった対象の違いによる実習の学び差異について

分析の結果、乳児院・児童養護施設に関しては、差が認められなかったが、これに関しては乳児院や児童養護施設では、配属されたホームが異なったとしても、大きな生活の環境は共有していることやその中で直接関わることはなくても、様々な児童の様子や職員の様子を見ることが出来ることが示されているのではないと思われる。

次に母子生活支援施設では、関わった対象によって「保護者支援理解」に差が認められ、幼児と主に関わった実習よりも学齢期まで含めて関わった実習の方がより「保護者支援理解」が出来るということが示された。これは、考察(1)でも述べたように幼児と主に関わる実習の場合、園内保育所での実習となるため、保護者支援よりも子どもの支援について重点的に理解が進み、一方学齢児と主に関わる場合には、学齢児が学校に登校している時間などは、施設内の環境整備や居室の掃除、職員からの講義などが行われており、そのような体験の中で保護者支援についてより理解を深める体験が得られたのではないと思われる。

障害児入所施設においても関わった対象によって「保護者支援理解」に差が認められ、成人と主に関わった実習よりも児童を中心に関わった実習の方がより「保護者支援理解」が出来るということが示された。これは、障害児入所施設を利用している成人の中には高齢者もあり、そのような場合、すでに保護者がいない場合や家庭復帰の目処が立たない場合も少なくないと思われる。そうすると施設での支援の中でも、保護者支援という視点に立たない支援が中心となると考えられるため、実習の中でも保護者支援について理解を進めることが難しかったのではないと思われる。

母子生活支援施設、障害児入所施設においては、「保護者支援理解」に関してだけではあるが、実習の中で関わる対象や実習内容の違いにより、学びに違いが出ることが示されたといえる。施設種が同じであっても、その内容によって学びに違いが出ることを考慮し、それぞれの施設でどのような対象と関わることになるのかについても事前指導やオリエンテーションの中で伝えることが必要になると思われる。

### (4) 実習先希望の認知、学びや体験の認知による学びの差異について

実習先が希望通りであったかどうかについては、83%が希望通りと回答しており、今回の実習先の決定方法で、約8割の学生が希望通りの実習先に行けたことが示された。同様の方法にて実習先の決定を行った松藤（2018）では、93%の学生が希望通りの実習先に行けたと回答しており、若干の差が認められる。これに関しては、学生が実習先の希望を出す際に、周囲の友人と同じ希望先を出すなどすることにより、一つの実習先に希望が集中してしまうことなどがあったのではないと思われる。実習指導は、ほとんどの内容を実習先決定後に行っているため、実習先の希望を出す前の段階の指導や希望通りの実習先とならなかった学生への指導について検討を行うことが必要であると思われる。また実習先で希望通りの実習を行えた割合、予想外の学びを得られた割合に関しては非常に高く、ほとんどの学生が事前指導等での事前学習を踏まえた希望通りの体験に加えて、事前学習だけでは想像出来ない体験や学びについても得ることが出来ていると考えられる。

実習先が希望通りに決定したと捉えているかにより、実習での学びに差異があるかを検討した結果、実習先が希望通りに決定したと捉えている学生の方が「関わり方理解」がより出来ているという結果が示された。松藤（2018）とは異なる結果となったが、これは使用した尺度が異なることや松藤（2018）ではそもそも希望通りの実習先ではなかったと捉えている学生が少なかったことが影響していると思われる。「施設理解」や「保護者支援理解」、「障害理解」については、実習での体験を通して希望通りかどうかは影響しないと考えられる。一方で、「関わり方理解」に関しては、施設の利用児者への関わり方を理解するためには、積極的に関わりを持つ必要があるため、実習先が希望通りに決まったかどうかと言う点が学生の実習における積極性やモチベーションに影響を与えた結果を反映していると思われる。

また希望通りの体験を得られたか、予想外の学びを得られたのかも実習の体験や学びと関連していることが示され、これは松藤（2018）と同様の傾向となった。



「施設理解」に関しては、どちらともに関連が認められ、施設の理解に関しては、実習前の事前学習の中である程度可能であり、その中で具体的なイメージを持って実際に体験し、学ぶことで学びが深まり、また事前学習では扱いきれなかった側面について実際に体験することによっても学ぶが深まる側面があると思われる。また予想外の学びを得られたかどうかについては、「障害理解」と関連しており、これに関しては障害に関しては、様々な授業で扱われるが、やはり実際に接してみなければ分からない側面も多様にあることが示されていると思われる。

##### (5) まとめと今後の課題

本研究の結果、実習施設での実習状況は、同一施設種であっても関わる対象や実習内容が異なることが示された。またそれと関連し、同一の実習施設種であっても実習の中での学びが異なる可能性も示唆された。事前指導を行う上では、そういった点を考慮し、各施設において実際に関わることになる対象を踏まえた指導等が必要になるとと思われる。

また施設実習における学びに対して、実習先が希望通りに決まったかどうか、実習の中で希望通りの実習体験が得られたか、予想外の学びが得られたが影響を与える可能性が示唆された。実習先を決定するにあたっては、学生が希望を出す前の段階で各施設の利用児者やその施設で学べることなどについて指導を行うことが必要になるとと思われる。また事前指導を通して、各施設で学べることにについて事前にイメージを持ち、実習での目標や課題を設定した上で実習を行い学びを深めるとともに、事前学習だけでは分からない部分についてもしっかりと目を向けて学びを深められるように指導を行うことが重要になるとと思われる。

今後の課題としては、本研究においては、単年度の学生を対象として分析等を行ったため、データ数が少なく十分な分析・検討が行えなかったため、同様の方法を用いたデータ数を増やし更に詳細な検討を行うことが挙げられる。

また実習先の決定に際して、学生がどのような基準・理由で実習先の希望を出しているのかについても調査を行うとともに、実習先の希望調査を行う前の指導が実習先決定に与える影響についても検討が必要になるとと思われる。

## 引用文献

相浦雅子・高濱正文・那須信樹・原孝成・野中千都（2008）  
保育実習指導のミニマムスタンダードを軸とした保育所実

習指導の実践に関する研究、別府大学短期大学部紀要、27、77  
藤重育子（2014）保育実習における学びと課題—施設実習後の学生の振り返りから—、東邦学誌、43(2)、160-170  
古川隆幸（2016）学生の社会的養護施設への関心と施設実習先決定過程に関する一考察—佐賀女子短期大学学生へのアンケート調査より—、佐女短研究紀要、50、109-113  
平尾太亮・土谷由美子（2016）保育士養成課程における施設実習に関する一研究、中国学園紀要、15、5-10  
本間英治（2012）保育の質に関する保育士の意識の実態—A市内における保育士へのアンケート調査を通して—、保育学研究、50(2)、102-111  
池田幸代・田中謙・前嶋元（2013）保育者養成校の施設実習における学生の学びの内容の分析、高等教育と学生支援：お茶の水女子大学教育機構紀要、4、54-61  
石山貴章・安部孝・田中誠（2010）保育士養成機関における「施設実習」の現状と課題（Ⅱ）—実習事後指導を通じた「自己評価」と「気づき」に関する分析から—、九州ルーテル学院大学紀要、40、59-72  
岩本健一・高岡昌子・高橋千香子・林悠子（2017）施設実習における学生の不安を軽減する事前学習についての研究、奈良学園大学文化女子短期大学部紀要、48、31-40  
松藤光生・中村恭子（2016）施設実習における実習施設種による学びの差異、中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要、48、65-71  
松藤光生・中村恭子（2017）施設実習における実習施設種と実習先の決定方法による学びの差異、中村学園大学発達支援センター紀要、8、59-65  
松藤光生・浦恭子（2018）施設実習における学びと体験に影響を与える要因、中村学園大学発達支援センター紀要、9、77-83  
大和田明見・関根美保子・鈴木春江（2014）保育士養成課程における施設実習の意味と意識の変化、帝京大学教育学部紀要、2、275-284  
多田内幸子・重永茂（2014）施設実習の前後での本学幼児教育学科学生の意識調査、久留米信愛女学院短期大学研究紀要、37、69-76  
土谷由美子（2006）施設実習に関する意欲と現状についてⅡ—学生のアンケートを中心に—中国学園紀要、4、85-90  
山口直範（2007）養護施設実習における短大生の心的発達効果、岡山短期大学紀要、30、79-82